

# 菅原道真研究

——『菅家後集』全注釈（十九）——

焼山廣志

一

今回は、前稿<sup>①</sup>に引き続いて五言排律「484 叙意一百韻」の五回目の注釈を試みる。対象とするのは百二十一句から百五十句までである。注釈を進める上での「凡例」は前稿<sup>②</sup>のそれに倣う。以下、作品の注釈は便宜上、十句ずつに分けて行っていくきたい。

二

484 叙意一百韻（13段） 〔121句から130句〕

本文

121 厭離今罪網

122 恭敬古真筌

123 皎潔空觀月

平仄

●○○●●

○●●●○

●●○○●

校異

○古…昔（大島）（松平）（彰考）（尊二）（尊二）（尊四）（太二）

（太二）（刊本）全本

▼頭注「昔作古」…（大島）

○誑…誑（尊一）

誰（尊二）傍注「推イ」

○厚…亭（尊四）

124 開敷妙法蓮

125 誓弘無誑語

126 福厚不唐捐

127 熱惱煩纒滅

128 涼氣序罔愆

129 灰飛推律候

130 斗建指星躔

○○●●●

●○○●●

●●●○○

●●●○○

●●●○○

○○○●●

●●●○○

\*脚韻は下平声「先」韻。韻字は「筌、蓮、捐、愆」である。

○熱…熨（尊二）（尊四）

**訓読**

- 121 厭離げんりす今の罪網
- 122 恭敬くんぎょうす古の真筌しんせん
- 123 皎潔こうけつたり空觀の月
- 124 開敷かいふす妙法の蓮
- 125 誓弘せいこうして誑語きやうご無く
- 126 福厚ふくこうくして唐指たうしゆせず
- 127 熱惱ねつなうの煩わづかい、穢けがれに滅なし
- 128 涼氣りやうきの序愆あやまつこと罔なし
- 129 灰飛はいひびて律候りつこうを推す
- 130 斗建とうけんして星躔せいてんを指す

**口語訳**

- 121 (私は)今のこの世の罪業と欲望とを厭い嫌って、それから遠く離れることとし
- 122 古えの真の悟りを、謹んで敬うことにしよう。
- 123 (空を仰げば)一切のものはすべて空であるという真理の月が白く穢れなく輝き
- 124 (地には)仏法の妙法(絶対の真理)をあらわすという蓮の花があまねく開いているのが見える。

125 仏や菩薩が一切衆生を救わんとする広大な誓願にうそ偽りがあるはずがなく、

126 それによつて救われる幸せは十分に厚いのであるから、その誓願が作り話として空しく捨て去られるということは、決してないだろう。

127 (そうこうしているうちに)もだえ苦しんだ夏の猛暑も少しは和らぎ、

128 そろそろ涼しい気配が順序どおりに訪れるはずで、間もなく秋が到来しよう。

129 (古代においては)灰を吹いて、その灰の飛び散り具合で気候を推しはかり、

130 北斗七星の柄の指し示すところによつて、天の運行や季節の変化を知った。

**語釈**

121○厭離…娑婆の苦痛をいとい嫌って世間を離れる。世を捨てる。いとい、捨て去ること。

『漢語大詞典』では「厭惡離棄」と説明する。蘇軾の「書黃魯直李氏傳後」の「無所厭離、何從出世、無所欣慕、何從入道」の用例を引く。

○罪網…川口久雄氏は岩波日本古典文学大系本では、「罪業欲望の果てしなく深いこと」との説明がある。ここでは、「網にかかったように罪深い世界にがんじが

らめに捕らえられているさま」と解釈した。

122 ○恭敬…うやうやしく慎む。敬い、つつしむ。仰ぎみる。

『詩経』の「小雅、小弁」に「維桑與梓、必恭敬止」の句が見える。

『漢語大詞典』では「①対人謙恭有禮貌」と説明し、『孟子』「告子上」の「恭敬之心、人皆有之」および『史記』「陳丞相世家」の「項王為人、恭敬愛人、士之廉節好禮者多歸之」の用例を引く。

○真筌…真の悟り。

真詮に同じ。真実の理法（ものごとの道理）を表す文句をいう。

123 ○皎潔…白くいさぎよい。白く穢れなく清らかなこと。

王維の「早朝詩」に「皎潔明星高、蒼茫遠天曙」の句が見える。

『漢語大詞典』では「①明亮清白」と説明し、『文選』班婕妤「怨歌行」の「新裂齊紈素、皎潔如霜雪」、裁為合歡扇、團團似明月」の用例を引く。同じく、『文選』鮑明遠の「學公幹體」に「豔陽桃李節、皎潔不成好」の句が見える。『白氏文集』3533 亭西牆下伊渠水中置石。激流潺湲成韻。頗有幽趣。以詩記之」には、「嵌巖嵩石峭、皎潔伊流清」の句が見

える。『紀長谷雄集』「56（3）青女可霜賦」には、「寒月曉殘、期皎潔於花表之頂」の句が見える。

○空觀…

『岩波仏教辭典』には「三觀」の項に「天台止觀の基本となる觀法で、瓔珞本業經の語に基づいた徒仮入空觀・從空入仮觀・中道正觀をいう。常識的思慮分別により真実とされるものは仏教の真実からすると仮のものであるという観点から、仮から空に入る、すなわちすべての存在は空であるとする空觀、本質的には実体のない空であるが、縁起によって存在している現実に眼を向ける仮觀、空觀と仮觀を止揚して不二とする中觀をいつたもので、空仮中三觀という」（三一頁）と説明する。（傍線筆者）

『漢語大詞典』では「仏教語」「対空諦」的觀想、以體認无祖為宗。亦指天台宗所立一心三觀（空觀・假觀、中觀）之一」と説明し、謝靈運の「石壁立招提精舍詩」にある「禪室栖空觀、講宇析妙理」の句を引く。

『菅家後集』「506 晚望東山遠寺」に「未得香花親供養／偏將水月苦空觀」の句が見える。この「空觀」は「この世のものはすべて空であるということを観じる」の意味で使っている語。

▼空觀月…ここでは現実の太宰の地の「空に掛かった

月を見る」と「空観という真理」という意味とをか  
けている。

124 ○開敷…花が開くこと。

『漢語大詞典』では「(花雑) 開放、繁栄」と説明す  
る。

○妙法…深遠微妙なことわり。理法。こよなき真理。

妙なる法。義理の深遠な仏法。とくに「妙法蓮華經」  
をいう。

『法華經』の「方便品」に「如レ是妙法、云々、如二  
優曇鉢華時一現一耳」の一文が見える。

『漢語大詞典』では「①仏教語。指レ義理深奥的仏法」  
と説明する。

『管家文章』「298 八月十五日夜思レ舊有レ感」に「茗  
葉香湯免飲酒、蓮華妙法換吟詩」の句が、又、『菅  
家文章』「208 八月十五日夜、思レ舊有レ感」にも

「茗葉香湯免飲酒、蓮花妙法換吟詩」の句が見える  
が、ここでの「妙法」はいずれも「妙法蓮華經」

「法華經」の意味で使われている。

○蓮…仏教においては、蓮華は泥中に生じてもそれ自体は

泥に汚されず清浄であるため、煩惱から解脱して涅  
槃の清浄の境地を目指す教えの趣旨に合致して、大

乗仏典の各經典で、浄土・理想の仏国の情景を叙述

する場合の必須の要素となっている。

(中村元『岩波仏教語辭典』岩波書店)

125 ○誓弘…「弘誓」として、中村元著の『仏教語大辭典』には、

「一切衆生を救おうとする菩薩の誓い。仏となる以  
前、修行している時期に発願した誓い。広大な誓  
い」との説明がある。

ここで道真が「誓弘」としているのは平仄を整える  
ためだと考えられる。

○誑語…欺言。でたらめな話。

『漢語大詞典』では「①説謊話」と説明し、『参同  
契』「卷下」の「惟斯之妙術兮、審諦不レ誑語」の  
用例を引く。

白居易の「與濟法師書」に「如來是真語実語、不レ  
誑語」不レ異語「者」の用例が見える。

126 ○唐捐…むなしく捨てること。

『法華經』「普門品」に「福不レ唐捐」の用例が、  
また『玄應昔義』に「唐、徒也。徒、空也。捐、棄  
也」の用例が見える。

『漢語大詞典』では「落空、虚耗、虚擲」と説明す  
る。

『法華經』「觀世音菩薩普門品」の「若有二衆生」

恭敬ニ礼拝観世音菩薩一、福不<sub>二</sub>唐捐<sub>一</sub>」の用例を引く。  
『菅家文章』262 国分蓮池詩 七言二十四韻に  
「未昔離心於魏闕、如今享福不唐捐」の句が見える。  
ここでは「唐捐」を「無駄に棄てる」の意味で使っ  
ている。

127○熱惱（呉音でネツノウ、漢音でゼツノウ）…心作用の一つ  
とする。ここでは、「猛暑に悩まされる」の意味と、  
両方かけている。

『白氏文集』3583 夏日與閑禪師林下避暑に「熱  
惱漸知隨念盡、清涼常願與人同」の句が、又、「2249  
贈韋處士、六年夏大熱旱」に「少壯猶困苦、況予病  
身老、脱無白梅檀、何以除熱惱」の句が見える。

128○涼氣…すずしい気。涼しさ。また、秋の気。

『芸文類聚』(卷三)、「礼記」卷五、「月令第六」に  
「礼記曰、孟秋之月、涼風至、白露降、寒蟬鳴、鷹  
乃祭<sub>すまひ</sub>鳥」の一文が見え、これを踏まえて、時節  
が「孟秋」(＝七月)に移ったことをここでは言っ  
ている。

『漢語大詞典』では「亦作<sub>レ</sub>涼氣、寒氣。清涼之  
氣」と説明し、『文選』曹子建の「贈丁儀詩」の「初  
秋涼氣發、庭樹微銷落」および孟浩然の「夏日浮

舟過<sub>二</sub>陳大水亭<sub>一</sub>詩」の「水亭涼氣多、間棹晚來過」  
の用例を引く。又、『文選』阮嗣宗の「詠懷十七首」  
に、「開花兆涼氣、蟋蟀鳴牀帷」の句が見える。

129○灰 …「蔑灰」のこと。あしの幹の中に薄いまくをやいて  
作った灰。この灰を楽器の律管の中に置いて気候を  
占う。冬至節に律が黄鐘の管の中たれば黄鐘管の蔑  
灰が飛動するの類。『漢書』「天文志」に「候氣之法、  
竹爲管、蔑草爲灰」の一文がある。曾偉の「王燭賦」  
に「斗柄潜移、蔑灰稍暢」の句も見える。

○律候…時候の移り変わりの規則。ほどあい。「律」は「笛  
の音で定めた音階。陰陽に二大別し、更に各々六分  
して合わせて十二律とする。之を一年十二箇月に配  
して時候の変化を察する」の意である。

『白氏文集』「秋霖即事聯句三十韻」に「律候今秋矣、  
歡娛久曠焉」の句が見える。

130○斗建…斗柄が左旋して指す辰をいう。斗柄の指す十二辰を  
十二か月に配するのを「月建」といい、大の月を  
「大建」、小の月を「小建」という。また、夏曆で、  
「正月」は寅を指すから「建寅の月」、二月は卯を  
指すから「建卯の月」とする。

↓ 補説 ①

○星躔：星の宿り、星度

『漢語大詞典』には、「日、月、星辰運行的度次」と説明する。太陽や月・星の天の運行の仕方（程度）のことである。

『田氏家集』の「9-1(4) 九月上山行」に「莫进玄珠逢象罔、罔分黄蕊見星躔」の句が見える。

補説 ①

▼130句目「斗建指星躔」の「斗建」について

松浦友久編の『漢詩の事典』の「北斗」の項につきのような説明がある。

「北斗」は時間の経過につれて、長い柄を振りながら北極星の周りを反時計回りに回転する。そこで、「北斗」には、時間の推移を寓意することがある。「北斗」が正座の代表となったのは、その円周運動の中心に北極星を戴くからである。その「北極星」は天の中央に位置して、その周囲に星を回らせている。それは権威の象徴であり、また地上の権威である天子と朝廷の譬喩であった」。

補説 ②

▼123句・124句「皎潔空観月、開敷妙法蓮」の「月」「蓮」について

この二語については、語釈の頁で言及したところだが、川口久雄氏は岩波古典大系本の頭注と補注で次のように説明されている。

「月」は真理の象徴。皎潔は、さやかにいさぎよい月光の形容。「蓮」華には「出水」と「開敷」の二義があり、泥水を超出し、次に真理の教えを開き示す、という。(四九三頁及び七三二頁)

いずれも『法華経』の教義に仮託する事象としてこの二句で使われている語であるのは先学の指摘の通りである。

一方で、筆者はこの二語が「実景」、つまり「今、目のあたり」にしている風物であり、それに触発された心情と考えられるのではないかと思う。これには、この「484 叙意一百韻」が詠作された時とも関わりがある。138句に「九見桂華圓」の句があるが、筆者はこの句から陰暦九月に詠作されたと見る。(三章の**考察**参照) この詩がほぼ時系列に、左遷の命が下ってから京を放逐される時より、仲秋を迎えつつある今までの九ヶ月の心情を記している内容と考えるならば、この「月」「蓮」の二語の使われている123句、124句は、実際に「蓮」の開花を迎える陰暦七月頃の夏の風物を詠んでいるもので、一方で、夏の終わりに初秋の空気が秋の気配を心なしか漂わせ始めた頃の

「月」を詠んでいるものと考えられないだろうか。少なくとも筆者には、太宰の謫居近くに、蓮の花の開花を見たとする機会があり、それにより、時節の推移を体感したものと考えたい。

三

484 叙意一百韻（14段） 〔131句から140句〕

131	世路間彌險*	●	●	○	○	●
132	家書絶不傳	○	○	○	○	○
133	帶寬泣紫毀	●	○	○	○	○
134	鏡照嘆花顛*	●	○	○	○	○
135	旅思排雲雁	●	○	○	○	○
136	寒吟抱樸蟬	○	○	○	○	○
137	一逢蘭氣敗*	●	○	○	○	○
138	九見桂華圓	○	○	○	○	○
139	掃室安懸磬	●	○	○	○	○
140	扇門嬾脱鍵	○	○	○	○	○

\*脚韻は下平声「先」韻、韻字は「蹠、傳、頭、蟬」である。

校異

○間…開（彰考）

聞（尊一）

▼間 鎌倉本作聞（刊本）全本

○險…隘（大島）（尊二）（尊四）（太一）（太二）（刊本）全本

▼頭注「彌隘作彌險」（大島）

○花…華（大島）（松平）（尊二）（尊四）（太一）（太二）（刊本）

全本

○嶺…顛（尊四）（太一）（太二）

顛（刊本）全本

▼頭注「華顛作花嶺」（大島）

○思…惟（静嘉）

▼頭注「思作惟」（大島）

○雁…鴈（彰考）

○樸…樸（静嘉）

▼頭注「樸作樸」（大島）

○敗…敗 鎌倉本作散（刊本）全本

○華…花（静嘉）

○掃…歸（大島）（松平）（尊一）（尊二）（太一）（太二）（刊本）

全本

▼頭注「歸作掃」（大島）

○嬾…懶（刊本）全本

訓読

- 131 世路間たりて彌険し  
 132 家書絶えて傳はらず  
 133 帯寛びて紫の毀るるに泣く  
 134 鏡照して花巖を嘆く  
 135 旅の思ひは雲を排する雁  
 136 寒吟は樸を抱く蟬  
 137 一たび蘭氣の敗るに逢ひ  
 138 九たび桂華の圓なるを見る  
 139 室を掃ひて懸磬に安んず  
 140 門を肩して脱鍵に懶し

口語訳

- 131 〈今の私は〉都から引き離されて、ますます（時節のみならず）時勢との隔たりも深くなり困窮している。  
 132 京の家族からの手紙も途絶えて、家族の様子も分からない。  
 133 私の体は痩せて帯がゆるくなり、紫の官服も色あせて、それを見ては涙がこぼれる。  
 134 鏡を照らして、そこに映った白髪頭を見ては嘆き悲しむ。  
 135 この太宰府で一人もの思いにふける様は（あたかも）たった一羽で雲を押し分け飛んでゆく雁のように切なくわびしいものだ。  
 136 私の泣く声は、秋風に吹かれて木肌にしがみついて寂しい

声で鳴いている、つくつく法師のようだ。

- 137 蘭（藤袴）の花が萎みおちて芳しい香りがなくなるのを（都を去り太宰府の地に赴いて）初めて目の当たりにし  
 138 月が満ちるのを九度見た。（外界は今、九月を迎えたのである）。  
 139 何もないがらんとした部屋にいて貧しさにも慣れ  
 140 門は閉ざしたまま鍵をはずすのも億劫だ。

語釈

131○世路：世の中、処世の道、世渡り、世途。

▼「世路難」：世路が困難で、意のごとくならぬのをかこつ語。

『漢語大詞典』には、「人世間の道路、指下人們一生処世行事の歷程」と説明する。『文選』成公子安の「嘯賦」に「狭世路之阨僻、仰天衢而高蹈」の句が見える。『白氏文集』0043 初入太行路詩に「若此世路難、猶自平於掌」の句が、又、『0096 讀史五首』に、「山林少羈鞅、世路多艱阻」の句が、『270 贈杓直』に「世路重祿位、棲棲者孔宣」の句が見える。

『菅家文章』179 夏日四絶「苦熱」に「未出炎蒸天地鑪、況行世路甚崎嶇」の句が、『240 三年歲暮、欲二更歸一州、聊述所懷、寄二尚書平右丞』に



「世路難於行海路、飛帆豈敢得明春」の句が見える。

又、「192 早秋夜詠」に「家書久レ絶吟レ詩咽、世路

多レ疑託レ夢占」の句が、また「301 白毛歎」に「陶

是行世路難」の句が見える。このように道真の詩

では、「世路」は「世路難」として、「世の中を生きて行く上で、困難で意のままにならないこと」をいう意で使われている。

○問 ……あいだ。へだてる。隔てる。遠ざける。離す。

尊経閣所蔵本では「聞」とする。

○險 ……けわしい所。刊本等にある「隘」は「狭い、険しい所」の意である。

▼隘路…物事をなすのに妨げとなるもの。難点、障害。

132 ○家書…郷家からの音信、家信、家問。『漢語大詞典』には、

「家人来往的書信」と説明する。杜甫「春望」に

「家書抵レ萬金」の句が見える。

「白氏文集」950 西樓」に「郷國此時阻、家書何處傳」の句が見える。

「菅家文章」の「192 早秋夜詠」に「家書久絶吟詩咽、世路多疑託夢占」の句が、「206 思「家竹」に

「纔馮客夢遊魂見、適問家書使口聞」の句が、また

「菅家後集」486 哭「奥州藤使君」に「家書告君喪、約略寄行李」の句が見える。

134 ○華顛…しらが頭。「華」は、「白い、また白髪」の意。

135 ○旅思…旅情、旅先での思い。

『漢語大詞典』には、「羈旅的愁思」と説明する。

旅に身をおく人（故郷を遠く離れてよその土地に身を寄せる人）の、まさにわびしくうれえての物思いの意である。

【文選】謝玄暉の「之宣城出新林浦向版橋」に「旅思倦搖搖、孤遊昔已屢」の句が見える。

【白氏文集】887 歲晚旅望」に「向晚蒼蒼南北望、窮陰旅思雨無邊」の句が、又、「1312 逢張十八員外籍」に「旅思正茫茫、相逢此道傍」の句が見える。

【菅家文章】の「379 重陽節侍レ宴、同賦「天淨識「賓鴻」、應レ製」に「賓雁莫教人意動、向前旅思欲何如」の句が見える。

○排雲…雲を押し分ける。『漢語大詞典』には、「排開雲層、多形容高」と説明する。

【文選】郭景純の「遊仙詩七首」に「吞舟涌海底、高浪駕蓬萊、神仙排雲出、但見金銀臺」の句が見える。

○雲雁…雁、かりがね、雲雁

【藝文類聚】の「雁」の項に、「礼記曰、季冬之月、雁北向」の一文が見える。

また松浦友久編の『漢詩の事典』（大修館書店）の

○寒蟬…秋になく蟬。

「雁」の項には、つぎのような説明がある。  
雁は大空に「一」の字や「人」の字を描き、整列して渡って行く。これを雁行という。このことから、古来、君臣の秩序・兄弟の上下関係をこの「雁行」で呼びならわしている。また、さらに、事柄に順序をつけて処理することも「雁行」といつたりもするのである。

なおこうした整列飛翔を習性とする雁であるから、群れを離れてただ一羽で大空を飛ぶ「孤雁」は、それだけで孤独者の象徴となる。

『凌雲集』「4-（4）重陽節神泉苑賜宴群臣勒空通風」に「樹聽寒蟬斷、雲征遠雁通」の句が見える。

『漢語大詞典』には、「謂凄厲鳴叫」と説明する。『文選』潘安仁の「秋興賦」に「蟬嘒嘒而寒吟兮、鴈表表而南飛」の用例が見える。

『菅家文章』の「306 吟善淵博士・物草醫師兩才子新詩、戲寄長句」に「大春堂下寒吟逸、弘景園中曉嘒悲」の句が見える。

○樸 ……あらし（荒木）切り出したままで、まだ加工をしていない木材。

『初学記』「蟬」の項に「礼記曰、仲夏之月、蟬始鳴、孟秋之月寒蟬鳴、徐廣車服雜注曰、待臣加貂蟬者、取其清高飲露而不食也。」の一文を載せる。また『藝文類聚』「蟬」の項に「礼記曰、仲夏之月、蟬始鳴、季夏之月寒蟬鳴」の一文が見える。陰曆五月に蟬始めて鳴き始め、初秋（陰曆七月）に寒蟬が鳴き始めると、いう意味である。「寒蟬」とは、「つくつくほうしやひぐらし」のこと。

『文選』「洞簫賦」に「秋蛸不食抱樸而長吟兮」（秋蛸食わず樸を抱きて長く吟じ）の一文が見える。秋の蟬は物も食わずに、木の皮に取りすがって鳴き続けるの意である。

松浦友久編の『漢詩の事典』の「蟬」の項では、「秋蟬は何も食わずに、ただ梢に結んだ清らかな露を飲むものと考えられていた。秋風の中で、葉もすがれようとする喬木の梢に止まり、ただ清露をすすって悲鳴高吟する蟬。それが人間の世界に投影されるとき、危ういまでに高潔な生き方の象徴となる」と説明する。

さらに『漢詩の事典』では、『白氏文集』「0510 早蟬」の一部の句、「六月初七日。江頭蟬始鳴／一催衰鬢色」。再動「故園情」／西風殊未起。秋思先秋生。」

を引き、つぎのように説明する。

「唐詩に詠じられた蟬の、より平均的なイメージは嘆老と郷愁という二つのやるせない感情によって代表されるものである。白居易のこの感慨は、蟬を秋の景物と見る意識の前提があつて、始めて成り立つものである。秋は、人生の秋を予感させる。人はそのとき帰らぬ家郷のことを、懐かしく思い出すのである。」

137 ○蘭

…①キク科の多年草。莖・葉・花すべてにかすかな芳香があり、秋（八、九月）に紫色の花が咲く。フジバカマ。〔漢辞海〕

『漢語大詞典』には「蘭氣」と説明し、庾信の「和樂儀同苦熱詩」の「美酒含<sub>二</sub>蘭氣<sub>一</sub>」、甘瓜開<sub>二</sub>蜜筒<sub>一</sub>、および王勃の「九日懷<sub>二</sub>封元寂<sub>一</sub>詩」の「蘭氣添<sub>二</sub>新酌<sub>一</sub>」、花香染<sub>二</sub>別衣<sub>一</sub>。」の句を挙げる。

『菅家後集』「475 冬日感庭前紅葉、示秀才淳茂」に「菊枯蘭敗梅猶嬾、詩興當追落葉凝」の句がみえる。

○敗 ……しばむ。しばみ落ちる。〔漢辞海〕

138 ○桂

…伝説上の樹木。月にあるとされる「月桂」。月の別称。《月中に桂があるとの伝説から》〔漢辞海〕『初学

記』「巻第一」「月第三」の「予対」に「虞喜安天論曰、俗傳月中仙人桂樹、今視其初生、見仙人之足、漸已成形、桂後生」等の故事を踏まえる。

『漢語大詞典』には「亦作<sub>レ</sub>桂花、指月」と説明し、庾信の「舟中望月」詩の「天漢看珠蚌、星橋視桂花。」の句、および韓愈の「明水賦」の「桂華吐耀、免影騰精」の句を引く。

『白氏文集』「2434 東城桂三首」に「遙知天上桂華孤、試問常娥更要無」の句が、又「醉後聽唱桂華」に「桂華詞意苦丁寧、唱到常娥醉便醒」の句が見える。

『菅家文章』「385 月夜詠櫻花、各分一字、應令一首」にも「芳氣近從階下起、莫言天上桂華開」の句が見える。

139 ○懸磬

…①家の中に何も無い、極めて貧しいさま。《何も無い家の中で屋根裏の垂木のみが目立ち、それが「へ」の字形の、磬をかけて並べたように見えることからいう。また、一説には、「磬」はつぎるの意》〔漢辞海〕。

②つるされた石の楽器。磬。

▼「磬」は中国起源の打楽器。「へ」の字形の石の板を架に吊り、桴でうち鳴らす。中国・朝鮮では雅楽用。日本では銅・鉄製で主に声明の合図用。

『漢語大詞典』では「①懸挂着的磬。②形容空空无所、極貧」と説明し、『國語』「魯語上」の「室如懸磬」、野無青草、何恃而不恐。(注)懸磬、言魯府藏空虛、但有椽梁如中懸磬也」の用例、および『後漢書』「陳龜傳」の「室如懸磬」の用例、および『宋書』「孔琳之傳」の「雖復室如懸磬、莫不傾産殫財」の用例、および柳宗元の「哭呂衡州詩」の「三歛空留懸磬室、九原猶寄若堂封」の句を引く。

140○扇門…戸を閉じる。扉を閉める。

『漢語大詞典』では「扇鍵・扇戸」と説明する。李白「贈清潭明府姪事詩」の「牛羊散阡陌、夜復不閉戸」の例を引く。

『菅家文章』二360 假中書懷詩二にも「門扇人賦到、橋破馬無過」の句が見える。

○嬾 …①不精なさま。なまけるさま。おこたーる。②疲れて体がだるいさま。ものうーい。『漢辭海』

## 考察

▼134句「鏡照嘆花顛」135句「旅思排雲雁」136句「寒吟抱樸蟬」に投影されている古典籍の考察

道真が太宰の謫居で初めて味わった梅雨・酷暑に悩まされな

がら、どれほど涼氣の漂う秋の到来を心待ちにしたか、想像に難くない。その一方で、秋は万物の凋落を象徴する時候でもあ。それは『楚辭』を始めとして古くから中国の文人たちが、多く詠んできたことでもある。

筆者は、道真のこの一三六句の「寒吟抱樸蟬」に『文選』所収の潘安仁の「秋興賦并序」中の「蟬嘒嘒而寒吟兮」の句の投影があることを既に「語釈」の頁で言及したが、再び、この「秋興賦」全文を吟味し、道真のこの詩との比較をしてみると、道真がこの賦の主題・詩情を強く意識し、投影させたものとなっていることに気付く。換言すれば、この潘岳の「秋興賦」の内容の理解を背景にして初めて、この道真の句内容が見えてくるような詠作がなされているように思える。

以下、「秋興賦」の原文を引用し、この点をしばらく考察してみたい。

▼秋興賦一首 並序 潘安仁 (『文選』卷十二所載)

晉十有四年、①奈春秋三十有二、始見一毛。以太尉掾兼虎賁中郎將、寓直于散騎之省。高閣連雲、陽景罕曜、珥蟬冕而襲紈綺之士、此焉游處。僕野人也、偃息不過茅屋茂林之下、談話不過農夫田父之客、攝官承乏、猥廁朝列、夙興晏寢、匪違底寧。譬猶池魚籠鳥、有江湖山藪之思、於是染翰操紙、慨然而賦。于時秋也、故以秋興命篇。其辭曰：

四時忽其代序兮、萬物紛以迴薄。覽花時之時育兮、察盛衰

之所託。感冬素而春數兮，嗟夏茂而秋落。雖末士之榮悴兮，伊人情之美惡。善乎宋玉之言曰：「悲哉秋之為氣也！飈瑟兮草木搖落而變衰。慄慄兮若在遠行，登山臨水送將歸。」夫送歸懷慕徒之戀兮，遠行有羈旅之憤。臨川感流以歎逝兮，登山懷遠而悼近。彼四感之疚心兮，遭一塗而難忍。嗟秋日之可哀兮，諒無愁而不盡。野有歸燕，隱有翔隼。游氛朝興，槁葉夕殞。

於是迺屏輕箑，釋纖綺。藉莞弱，御袷衣。庭樹槭以灑落兮，勁風戾而吹帷。③ 飈搖蕩而寒吟兮，② 鴈飄飄而南飛。天晃朗以彌高兮，日悠陽而浸微。何微陽之短晷，覺涼夜之方永。月瞳隴以含光兮，露淒清以凝冷。熠燿粲於階闔兮，蟋蟀鳴乎軒屏。聽離鴻之晨吟兮，望流火之餘景。宵耿介而不寐兮，獨展轉於華省。悟時歲之適盡兮，慨俛首而自省。斑鬢影以承弁兮，素髮颯以垂領。仰群儁之逸軌兮，攀雲漢以游騁。登春臺之熙熙兮，珥金貂之炯炯。苟趣舍之殊塗兮，庸詎識其躁靜。聞至人之休風兮，齊天地於一指。彼知安而忘危兮，故出生而入死。行投趾於容跡兮，殆不踐而獲底。闕側足以及泉兮，雖猴猿而不履。龜祀骨於宗躁兮，思反身於綠水。

且斂衽以歸來兮，忽投紱以高厲。耕東皋之沃壤兮，輪耒耜之餘稅。泉涌湍於石間兮，菊揚芳於崖澁。凜秋水之涓涓兮，玩游儻之激激。逍遙乎山川之阿，放曠乎人間之世。優哉游哉，聊以卒歲。

まず、語句・詩情の投影が窺える所として [ ] で囲んだ①

③の箇所が、道真の句の一三四、一三五、一三六句に指摘できるのではないかと思う。

一方、この「秋興賦」の内容全般に踏み込んでみると、秋という万物の凋落する候に触発されて、潘岳の心境の吐露がある。又、そこには、潘岳の年齢からくる老いと、いままでの人生の回顧が語られている。宋玉の「楚辭」の一文を引きつつ、人生の栄枯盛衰の理をこの時候に遭遇して改めて実感できることを詠う。そして、自分の回りの人間たちの、飛び鳥を落とすような勢いで、今の自分の繁栄を享受していることへの懷疑の念と、我が身の今後の処世を自省した上で、官職を捨て、自分の故郷に戻り、自然とともに、悠々自適の生活こそ、自分の希求するものだと締める句内容である。この賦を道真はどのような心情で想起したのであろうか。

正しく、人の栄枯盛衰を道真自身が、目のあたりにしているだけに、今まで道真自身がこの賦を踏まえて句作りをしてきたものと全く異なる切実感、緊迫感がそこにあつたはずである。潘岳が自分自身を「野人」である、友は「農夫」であり「田夫」であるとし、そこに今の官吏の職を投げ捨てて戻ることこそ、自分の願うものがあると詠っていることを、道真が我が身に照らした時、「儒家」としての自覚・矜持が、改めて頭をもたげたのではないか。それが、一五一句以降の京への望郷の念と、自分の「儒家」としての過去の栄枯盛衰の叙述につながっていくものと解釈したい。

考察 ②

▼138句「九見桂華圓」の解釈について

この一句の解釈については、川口久雄氏「都をあとに配所に赴いてから、九回月が満ちるのを見た。九ヶ月経過したことをいう」(岩波古典大系本 頭注 四九六頁)を始めとして先学は、陰曆十月以降のことを指すとし、この「叙意一百韻」の詠作年月を、この一句より推測できるとするが、筆者はこの一句を、「今年に入って九回目の満月を迎えた」と解釈しこは「陰曆九月を迎えた」との意であると考える。その根拠は、この「叙意一百韻」が、配流から、この詩を詠作するまでの心境をほぼ時系列にその時々的事象をおりこみながら整理した句作りがなされている事実にある。この138句までの前の句を見ると、酷暑から涼気を感じる時候に移りつつあることを「蓮の花」や、夜空に浮かぶ「月」で感じ、さらに「寒蟬」や「蘭の花」にみている。それは「陰曆九月」の事象と合致する。

一方、それが陰曆十月以降となると、「晩秋」「初冬」の事象に及んでしかりであるが、その証となる詩情が見あたらない。

更にこの「叙意一百韻」の詩の直後に「485 秋夜 九月十五日」を置いていることからほぼ『菅家後集』の詩作品も時系列に配置していることから鑑みるに、この詩が十月以降の作とした場合、あえて、これを破り、「485 秋夜 九月十五日」の前に置く事由が、見当たらないのが、筆者の考えである。こ

こは、「陰曆九月」に詠まれたことを意味しているとみなしたい。

四

484 叙意一百韻 (15段) } 141句から150句 }

本文

平仄

141	跛胖重有繫*	●●●●●
142	瘡雀更加攀	●●●●○
143	強望垣牆外	○●●○○
144	偷行戸牖前	○○●●○
145	山看遥縹緑	○○○○●
146	水憶遠潑潑	●●●○○
147	俄頃羸身健	○●●○○
148	等閑殘命延	●○○●○
149	形馳魂恍惚	○○○○●
150	目想涕漣漣	●●●○○

\*脚韻は下平声「先」韻、韻字は「潑、延、漣、年」である。

校異

○繫 ……熱 (静嘉)

▼頭注「繫作熱」(大島)

…熱 (彰考)

○雀 …… 災 (彰考)

災雀イ (尊一)

○閑 …… 間 (大島) (刊本) 全本

▼ 頭注「間作閑一」(大島)

○漣漣…連連 (大島) (刊本) 以外の写本全本

▼ 「漣漣作連連」(大島)

**訓読**

141 跛牂 重ねて繋有り

142 瘡雀 更に攀を加ふ

143 強いて望む 垣牆の外

144 偷かに行く 戸牖の前

145 山には遥かにして漂緑なるを見る

146 水は遠くして潺湲たるを憶ふ

147 俄頃羸身健やかに

148 等閑残命延ぶ

149 形馳せて魂恍々たり

150 目想いて涕漣々たり

**口語訳**

141 我が身は、片足が悪いうえにつながれて自由のない雌羊のよう  
142 さらに、かさができたうえに体の自由が利かず、飛べない

雀のようでもある

143 (そんな不自由な体ながら) 無理やりにかきねの外を望み

144 人目を忍んで戸口や窓の前をうろついている。

145 (九月となり) 目をやれば、(空気が澄み) 遙か彼方の山々

がはなだ色に輝き、(くつきりと) 見えるようになった。

146 (秋が深まり静寂さが訪れ) 小川ははるか遠くまでさらさら

と流れている音を聞き、(静かに) その様を思いやる。

147 (こうした情景を目にすると) 瘦せて虚弱な身体も、にわ

かに健やかになるような気持ちがあるし

148 (こうした情景に) 身を任せていると(病のことも忘れ)

命も伸びる心地がある

149 (その一方でこうした好時候に巡り合うと) 茫然自失し、

心(魂)が京都に馳せて行ってしまうのである。

150 まぶたを閉じると(改めて京の事が想起され)、目から涙

が止めどもなく流れて出る。

**語釈**

141○跛 …… 一方の足が不自由なこと。あしなえ (『漢辞海』)。

○牂 …… 雌のヒツジ。めひつじ。(『漢辞海』)

『詩経』「小雅、苕之華」に「牂羊墳首、三星在罍」の句が見え、『詩経』「集伝」「毛伝」に「牂羊は牝羊なり」と説明する。

『漢語大詞典』では「亦作 跛荷。跛足的母羊」

と説明し、『韓非子』「五蠹」の「故十仞之城、樓季不能踰者、峭也、千仞之山、跛牂易<sub>レ</sub>牧者、夷也。故明主峭<sub>二</sub>其法<sub>一</sub>、而嚴<sub>二</sub>其制<sub>一</sub>也」の用例、および『塩鉄論』「毀學」の「況跛牂<sub>レ</sub>燕雀之屬乎」の用例、および『後漢書』「孔融傳」の「是使<sub>レ</sub>跛牂<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>規<sub>レ</sub>高岸<sub>一</sub>、天險可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>而登<sub>レ</sub>也。」〔注〕爾雅曰、羊牝曰<sub>レ</sub>牂」の用例、および『史記』「李斯列傳」の「泰山之高百仞、而跛荷牧<sub>二</sub>其上<sub>一</sub>」の例を引く。

▼ここでは、道真自身のことを「足の不自由な牂」に喩えている語だが、この語は既に、「請罷藏人頭狀」〔本朝文粹〕にも所載あり〕で使われている。この書状は、『公卿補任』によれば、寛平三年二月九日に式部少輔に任ぜられ、続いて二月二十九日に藏人頭に任ぜられた時に、この任を辞すことを請う一文を指す。その中に、「勿傳跛牂妄觸仙欄。腐鼠初汗禁省而已。」（跛牂をして妄に仙欄に觸れ、腐鼠をして初めて禁省を汗さしむるなかれ。）

自分自身を「跛牂」「腐鼠」のような、役に立たぬ庸臣と述べる一文である。この「跛牂」は先に述べた『史記』の「李斯列傳」を典故とする語であり、「腐鼠」は、「一羽のふくろうが、腐った鼠を手に入れたところ大鳥の鷓鴣が通りかかり、自分の手にした獲物が取られるのを恐れて鷓鴣を威嚇した」と

#### 142 ○瘡

いう『莊子』の「秋水」の一文を典故とする語である。道真はこの語を、本詩「叙意一百韻」の九十句で「飢類嚇雛鷺」（飢えては鷓鴣を嚇す鷺に類へり）と句作りしていることは前稿で詳述したところである。（菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（十八）―有明工業高等専門学校紀要 第四十五号 四（五頁））

こうしたことから考えれば、ここでの「跛牂」の語は、道真にとって既に使い慣れていた語と断じてよいと思う。

#### ○雀

…できもの。かさ。（『漢辞海』）

…『漢詩の事典』の「雀（黄雀）」の項では、「雀は、最も身近な鳥である。だから雀の描写が、他の鳥にもまして具体的かと言えば、必ずしもそうではない。そこに描かれる姿は、写実的というよりも多分に類型的、観念的なのである。そのイメージは、何よりも卑小さにある。①大志を持たない小人、あるいは②権力者に虐げられる細民の譬喩である。またまれに、③農作物を食い荒らす害虫として、貪欲な官吏の譬喩になることもある」と説明する。

#### ○鷓

…手や足が曲がったまま伸ばせない。かがまる。ひき



つる。つゝる。(『漢辞海』)

143○垣牆…かさね。かこい。(『漢辞海』)

『漢語大詞典』では「垣牆」と説明し、『禮記』「月令」の「坏垣牆、補城郭」の用例、および「戰國策」「燕策」の「國之有封疆、猶三家之有垣牆」の用例、および「莊子」「庚桑楚」の「將妄鑿垣牆、而殖蓬蒿也」の用例、および韓愈の「守戒」の「宅于都者、知穿窬之為盜、即必峻其垣牆、而内固扃鑰以防之」の用例を引く。

○文選 曹子建の「送應氏詩」に「宮室盡燒焚、垣牆皆頽靡」の句が見える。

144○戸牖…戸口と窓。「牖」は「壁に開けた窓」。

『漢語大詩詞典』では「門窓」と説明し、『老子』「十一」の「鑿戸牖以為室」の用例、および「淮南子」「精神訓」の「夫孔竅者、精神之戸牖也」の用例、および『後漢書』「王充傳」の「戸牖牆壁、各著戸刀筆」、著論衡八十五篇、二十餘萬言」の用例、および「淮南子」「汎論訓」の「夫戸牖者、風氣之所從往來」の例を引く。

▼「不出戸牖」…家から一步も出ない。

『孔子家語』「王言解」の「其不出戸牖、而化」

「天下」の用例、および『吳志』「趙達傳」の「不出戸牖」、以知「天道」の例がある。

『菅家文章』「75 秋日山行二十韻」にも「戸牖茶千峙、江湖帶一條」の句が、また『菅家後集』「477 詠樂天北窓三友詩」にも「開方雖窄南北定、結宇雖疎戸牖宜」の句が見える。

145○山 ……ここでは太宰府謫居より眺められる山々の事。北に位置する「四王寺山脈」、東に位置する「高雄山」、南に位置する「天拝山」を指すと思われる。

○縹緑…薄青色、はまだ色。

『隨書』「禮儀志七」に「天子以雙綬六采、玄黃赤白縹緑」の例が見える。

146○潺湲…水のさらさらと流れる様又その音

『楚辭』「九歌、湘夫人」に「荒忽兮遠望、觀流水兮潺湲」の句が見える。また「懷風藻」「大津首、和藤原太政遊吉野川之作上詩」に「潺湲浸石波、雜沓應琴鱗」の句が見える。

『菅家文章』「470 和下紀處士題新泉之二絶上次韻」に「瑠璃地上水潺湲、遮莫銀河在碧天」の句が、また「437 北堂文選竟宴、各詠史、句、得三乘月弄潺湲」に「五言何秀句、乘月弄潺湲」の句

が、また「315 水聲」に「夜久人閑也不風、潺湲觸、  
聽感無窮」の句が、また「161 灘聲」に「避喧雖  
我性、唯愛水潺湲」の句が見える。

『凌雲集』「88-（2）伏枕吟」に「心倒絶兮悽今日、  
淚潺湲兮想昔時」の句が、又『文筆秀麗集』「95-  
（8）訪幽人遺跡 一首 平五月」に「因今訪古跡  
不覺淚潺湲」の句が見える。又、『礼長谷折集』に  
も「4（5）山家秋家（越調）」に「空山幽静水潺湲、  
獨臥雲中不限年」の句が見える。

147 ○俄頃…しばらく。瞬時。またたくま。しばし。

『孔子家語』「六本」に「俄頃左右報」の用例が見  
える。

『漢語大詞典』では「片刻、一会兒」と説明し、『文  
選』郭璞の「江賦」の「條忽數百、千里俄頃、飛廉  
無以踰其蹤、渠黃不能企其景」の句を引く。

○羸身…ひ弱な様、瘦せて虚弱な様

148 ○等閑…物事に意を留めないこと。なおざり。あるがままに  
まかせる（『新字源』）。

錢起「帰雁詩」に「瀟湘何事等閑回、水碧沙明兩岸  
苔」の句が、また賈島の「古意詩」に「俱為不<sub>レ</sub>等  
閑、誰是知音目」の句が見える。

『漢語大詞典』では「①尋常、平常」と説明し、前  
述の賈島の「古意詩」の「志士終夜心、良馬白日足、  
俱為不<sub>レ</sub>等閑、誰是知音目」の例を引く。また「②輕  
易・隨便」と説明する。

『白氏文集』1259 新昌新居詩に「等閑栽<sub>二</sub>樹木<sub>一</sub>、隨  
分占<sub>二</sub>風煙<sub>一</sub>」の句が、「063 琵琶行」には「今年歡  
笑復明年、秋月春風等閑度」の句が、「1399 晚興」  
に「等閑消一日不覺過三年」の句が、「3089 自詠」  
に「等閑池上留賓客、隨事燈前有宮絃」の句が見え  
る。

149 ○怳々…ほんやりしてはつきりしないさま。氣抜けしたさま。  
失意のさま。

司馬相如の「長門賦」に「神怳怳而外淫（注）善曰、  
王逸楚辭注曰、怳、失意也」の用例が見える。

『漢語大詞典』には「①模模湖湖、彷彿」と説明し、  
李白の「草書歌行」の「怳怳如聞神鬼驚、時時只見  
龍蛇走」の句を、また「③失意不安貌」と説明し、  
先の司馬相如の「長門賦」の「登蘭臺而遙望兮、神  
怳怳而外淫」の句を引く。

○連々…連なり絶えないさま、延々と続くさま、連なるさま。  
『漢語大詞典』では「①接連不斷」と説明し、『莊  
子』「駢拇」の「則仁義又奚連連如膠漆揜索、而遊

乎道徳之門為哉、成玄英疏、連連猶接続也」の例、および陳琳の「竹馬長城窟行」の「長城何連連、連連三千里」の例を引く。

また「②猶連連」と説明し、『全唐詩』卷八六三載「醉吟」の「一旦形羸又髮白、舊遊空使淚連連」の例を引く。

○連々…とめどなく涙が流れるさま。(大島文庫及び刊本全本)

『詩経』「衛風、氓」に「不見復關一、泣涕連々一」。「釋文」連、音連、泣貌」の句が、また『漢書』「韋賢傳」に「漣漣孔懷」の文が、また劉向の『九嘆』に「思念鄢路一兮還顧睠睠、涕淚交集兮泣下漣漣」。「注」漣漣、流貌也」の例が見える。

▼ここでは、句意より刊本等に載せる「漣々」を採用した。

### 【総括考察】

今回注釈の対象とした百二十一句から百五十句の内容を概説してみる。前で言及した(注1)ようにこの二〇〇句全篇は、道真自身の京から突如太宰の地への左遷が決行された二月から、この詩の制作されたと想定される秋の九月まで、季節で言うと、春・夏・秋の道真自身が目にした実景を通し、それを基軸とし

て、時折々の心象風景を、糸をつむぐように織り込んでいく句作りがなされているように思える。そこには中国の古典籍の事蹟を効果的に織り込みながら詩空間を上げつつ緻密な構想のもとで句作りがなされており、決して感情のおもむくまま激情を紙に書きなぐったような類の作品ではない。

今回取り挙げた百二十一句から百五十句は、十句毎を一段とすれば、「十三段」目にあたる。この十句では、「盛夏から初秋」の時候を基軸に、「大宰府謫居の今の心象風景」を詠う。具体的には仏教の世界を希求することにより己の煩惱を排除しようと試みる。そこには太宰の地の夜空に浮かぶ月と蓮の花の開花の情景に触発されてのそれであると思う。

続いて百三十一句から百四十句の「十四段」では「酷暑が去り、仲秋を迎えた時候の心象風景」を詠う。百三十八句で「九見桂華圓(九たび桂華の圓かなるを見る)」と詠むように、陰曆九月、仲秋の名月を鑑賞する時候を迎えたのである。こうした本格的秋の気配、秋の事物に触れるにつけ、今の自分自身の置かれている事態の悲惨さ、そしてその事態の打破には、京に戻るしかないのに、それがままならぬ心情、望郷の念に、宋玉の『楚辞』九弁、および潘安仁の『秋興賦』の詩情を投影させ、それをバックボーンに置きながら切なく詠う。

そして百四十一句から百五十句の「十五段」では、秋の風物に触発されての「心象風景」を詠う。ここには、わが身を百四十一・百四十二句で「跛胖重有熱(跛胖 重ねて熱有り) 瘡雀

更加攀（瘡雀 更に攀を加ふ）」と詠むように今の太宰の我が身の姿を「跛牂」「瘡雀」と自虐的に形容する。そこには老齢に加え心身ともに苛酷さを増す太宰の謫居生活から来る我が身の衰えと共に、かつて要職を拝したときに、辞退したい旨の文書を作成した中で使った、我が身を卑下する文言が、今、この太宰の地で現実のものとなっていることへのやりきれなさが切々と句裏より詠み手に伝わってくる。そして昨秋は京の地でこの秋の風物を味わっていた我が身を想起するに、一層の望郷の念と現状への悲惨さが拡張されてしまう心情を詠んでいるのである。

【注】

(1) 拙稿「菅原道真研究―菅家後集」全注釈(十八)」「有明工業高等学校 門学校紀要」第十五号

(2) 拙稿「菅原道真研究―菅家後集」全注釈(二一)―

(「国語国文学研究」第三十六号) 熊本大学国語国文学会

〈追記〉(一)

この稿を草するにあたり、木下文理氏より多大のご助力をいただいた。とりわけ、語釈、「白氏文集」の詩語の検索などにお力添え頂いた事に深謝申し上げます。

又、台湾元智工學院の中国古典詩詞曲文研究のためのサイトである「網路展書讀(BIG5)」(<http://dsadmin.yzu.edu.tw/>)の『全唐詩』の項、及び北

京大学中文系の唐代以前の詩歌の総合データベースである「全唐詩全文検索系統(UTJ-8)」(<http://chinese.pku.cn/cgi-bin/tauglibrary.exe>)を詩語検索の為に大いに利用した。

〈追記〉(二)

平成十八年四月より、「大牟田市民大学講座」市民大学ゼミ、道真梅の会への会員、須藤修一氏・諸田素子氏、田中陽子氏、野田了介氏、井原和世氏、荒川美枝子氏の六名と定期的に「敘意一百韻」の講読会を催して来た。そして、この会で討議・検討したものを基に昨秋、「敘意一百韻」全注釈(焼山廣志監修 道真梅の会編)を発刊した。本稿はその内容に再考察を試み若干、加筆し稿をしたため直したものである。

とりわけ百二十句から百二十八句は須藤修一氏の、また百二十九句から百三十六句までは荒川美枝子氏、また百三十七句から百四十四句は野田了介氏の、また百四十五句から百五十句は田中陽子氏の調査、発表原稿が基となっている。深謝申し上げます。

／＼ やきやま ひろし

大学院文学研究科第七回修了／有明高専